

第1回 第四次長野市子ども読書活動推進計画策定委員会 会議要旨

- 【日 時】 令和4年5月25日（水） 午前10時～正午
- 【場 所】 長野市生涯学習センター3階 学習室5
- 【出席者】 委 員 石井春恵委員 伊藤直子委員 岡田まみ委員 小林洋子委員
西澤久美子委員 林明美委員 渡邊望委員
事務局 丸山教育長 藤澤教育次長 勝野教育次長
長野図書館長 南部図書館長 健康課長補佐 保育幼稚園課長補佐
こども政策課長 教育委員会総務課長 学校教育課長
(家庭・地域学びの課) 野池課長 前田補佐 古平係長 湯本主事

- 【会議内容】
- 1 開会
 - 2 策定委員の委嘱
 - 3 教育長あいさつ
 - 4 自己紹介
 - 5 委員及び副委員長選出
 - 6 委員長あいさつ
 - 7 諮問
 - 8 協議事項
 - (1) 策定の概要
 - (2) 国・県の子ども読書活動推進計画について
 - (3) 第三次長野市子ども読書活動推進計画の最終点検について
 - (4) 第四次長野市子ども読書活動推進計画の策定について
 - (5) 今後のスケジュールについて
 - (6) その他
 - 9 閉会

<次第>

9 協議事項(3)について

委 員： 「読書活動」という言葉でくくられているが、長野市が目指しているのは、思考力・追究力といった児童の力を育てることに結びつく「読書活動」と捉えてよいか。令和3年度の(第三次計画の)進捗状況に目を通したが、どうしても対処的にならざるを得ないというか、問題の根本の部分の分析については疑問を感じる。自分は小学校(に勤務していた期間)が長かったのだが、現状、なぜ子どもたちが図書館

に足が向かないのかということが、現場でどれだけ分析されてきて、それが吸い上がってこの調査報告に反映されているのか。第三次計画策定の際には市で仕事をしていたのだが、その時の計画策定の担当者から、(小学校)入学前まで(の読書活動)は充実してきているが、小学校に入ってからには非常に課題を感じていて、(計画の中に)文言として(目標を)作成しても、それが現場でどのように生きるだろうか、と相談を受けたことがあった。このことは、自分も同様に感じている。確認したいのは、自分がここ(策定委員会)で何かを話す時には、そういう(思考力・追究力といった児童の力を育てることに結びつく)ものを目指している「読書活動」という立場でものを言うのか、ということである。かつて、図書館教育に関わっていた時に、他の郡市では「ごはん本」「おやつ本」という言葉を使っていた。どういうことかということ、名作と言われる「ごはん本」に対し、子どもたちがとっつきやすい「おやつ本」は、ある意味で楽しいが、「ごはん本」と比較するとおもしろさの深さが違う。長野市が追及している「おもしろさ」というのは、表面的なおもしろさではないと、私は捉えたいので、いわゆる「ごはん」になる「ごはん本」を長野市の子どもたちに読んでほしい。「おやつ本」も、子どもたちは好きなので否定はしないが、「ごはん本」の稼働率がどうか、それが中学校に行ってもどうかということを考えてい。

2点目は、学校教育課と家庭・地域学びの課の読書に関しての連携が弱いと感じている。読書教育活動について長野市が本腰を入れてやるのであれば、指導者が必要である。図書館教育に長けていて、全市のネットワークの縦を貫くような、どこともつなげられるような方は現在いるのだろうか。第四次計画を作って終わりではなく、それを実につなげていくためには、図書館教育に力を入れていく指導主事が必要なのではないかと感じている。

委員長： ありがとうございます。そのあたりは、次の(協議事項である)第四次計画の策定についてのところで、もう少し深く議論ができるのではないと思うが、担当課の方から何か(発言は)あるか。

事務局： 連携という点で、学校教育課の中に「指導主事」という学校から来た職員がいる。他の業務も行いながらではあるが、図書館教育担当の指導主事もあり、年に何回かある学校司書の集まりにも必ず参加し、市としての考えを伝えたり、あるいは学校司書の考えを聞いたりしながら、意見交換を行っている。また、本当に子どもに力がつく、つかない、というところは非常に大事なところだと思う。図書館教育の指導主事とは別に、教科の指導主事である国語の指導主事もあり、学校へ訪問して読書活動のあり方などを助言・指導をしている。今回のこの(第四次)計画策定に当たり、実際子どもたちにどう生かしていくのかということは、そのあたり(図書館教育担当の指導主事や国語の指導主事)を通じて学校と連携を図っていければと思う。

委員長： 第四次計画の策定に当たって、非常に推進力のあるご意見を頂戴できたと思う。
私から、先ほどの意見に関連して第三次計画の結果について伺いたい。事業番号
14・15・16 は不明という記載があるが、原因等が分かれば教えていただきたい。

事務局： 確認して、次回お答えする。

委員長： 事業番号 53 は図書館と学校との連携ということで、学校司書からの個別相談に
対して支援をしていくというとても良い取り組みだと思うが、個別の相談は実際
にはどのくらいあったのか。このあたりが、全員で同じ方向を向くことができてい
るか、という先ほどの意見につながってくるのではないと思う。

事務局： 資料3の5ページ「(学校図書館に関する)相談体制の整備」について、相談に
は技術的な相談と学習面の相談と2面がある。技術的な相談については、図書管理、
読書センター機能の部分について、市立図書館と連携している。学習面(の相談)
については、学校教育の指導主事が担当している。(相談を担当する指導主事につ
いては)学校司書から専属が良いという要望はあるが、体制的に上手くいっていない
部分もあり、併任という形で担当を置いている。学校司書もそれぞれ経験年数が
異なるため、それを補うこと、学校司書同士の連携を深めることを目的として、市
内を7ブロックに分け、年2～3回「支会」を実施している。各ブロックで研修テ
ーマを決め、その場に講師として指導主事が出向いている。まだまだ不十分かもし
れないが、現状としてはこのような形でやっているということでご理解いただきた
い。

委員長： 前向きに取り組んでいただいているということがよく分かった。ありがとうございました。

委員： 学校図書館司書について、法律ができて市が採用しているということであるが、
研修なども充実してきているのか。

事務局： 学校図書館法が改正になり、(学校図書館司書の)直接任用は努力義務になって
いるが、長野市では全校に配置している。ただ、中山間地の学校では小・中兼務の
ところもあり、(現在)79校中75人の学校司書を任用している。それとは別に、
12クラス以上の学校には司書教諭を置かなければいけないが、司書教諭は専属で
はなく、担任を持った中でやっているため、学校司書と司書教諭の連携がなかなか
上手くいかないという声も聞こえてきている。学校ごとに温度差があることは事
実であり、課題となっていると捉えている。それを補うために、先ほど申し上げた
学校司書の研修会の中でそれぞれテーマを決めて改善していくということを行っ
ている。

委員長： ご質問、ご説明ありがとうございました。前向きに動き出しているところだとい
うことがよく伝わってきた。

9 協議事項（４）について

委員： 第三次計画で４年間やってきて、現状がどうであるか。市立長野図書館、南部図書館は一生懸命努力されているが、学校と連携が取れていない。市立図書館が、本のリストを作成して（学校へ）配布していたが、そういうことをしてきても、なかなか向上しない。（第四次計画を策定する）４か月の間に、保育園・幼稚園、小学校の実情や何が課題なのか、それらを踏まえた文言や実践可能な取り組みを明確化することは難しいのか。

委員長： 現状、今年度の数値（を示すこと）は難しいということで、（事務局から）昨年度の数値を説明いただいた。それを踏まえて（考える）ということになると思う。ただ、今おっしゃられていることは、数字でない部分も含めてということだと思う。今、ここで委員の皆さんから提案や現状をお話いただけると、作業部会で話し合うものになるのではないかなと思うが、委員の皆さんから質問や意見はあるか。

委員： 事業番号 53「学校図書館に関する相談体制の整備」について、学校司書や図書館に携わる職員の声を吸い上げていただいていると思っている。（学校司書に関しては）勤務時間の関係等もあり、悩みがつきなかったが、支会ごとのワーキンググループで生の声を吸い上げていただいた。具体的には、市立図書館における調べ学習で使用する本の取り置きサービスである。調べたい本を市立図書館から提供してもらうときには、学校司書が通勤途中に本を借りに行くこともあったが、学校司書ではない学校職員も勤務時間内に行ってもよいということになったワーキンググループが立ち上がり、色々と検討していただいているということを学校司書は皆知っていて、そこから発信されるものにも注目している。

（読書活動の）一番の目的は、自学自習である。本から生まれる想像力や感性は、予測困難な時代に非常に重要であるということは皆が分かっていることである。何とか（本と子どもたちを）つなぎたいと現場は思っている。施策の関係で考えていくと、（学校司書は）勤務体制により、実際に動きたいけれども動けないというしがあるようなので、その辺りの情報を吸い上げてもらうことで、より実働ができ、目標に向かっていけたらと感じている。

事務局： 今提案があったことについて、中山間地域の学校に関しては、市の連絡便を使用し、図書館から学校への本の配送を昨年度の途中から行っている。また市街地の学校に関しても、南部図書館の閉館時間が午後６時のため、（学校職員が図書館へ来館することが）時間的に難しいという情報をいただき、事前に（学校司書から）どういった本が必要かということを取り、図書館司書が本を選んで取り置きをしておいて、来館した先生がその用意した本を持ち帰るという方法を現在試行中である。状況を見て、今年度中に本稼働することになるかなと思う。このような形で、学校との連携は強化されてきていると思っている。

委員長： 市立図書館では、積極的な学校とそうでない学校のバランスについてどのように

感じられているか。

事務局： それぞれの学校についての様子までは分かっていない。

委員： 保育の現場についてであるが、保育園ではまず絵本から入る。言葉の獲得と絵本は密接に関連している。最初は「ワンワン」や「ブーブー」などの名詞が何を指しているかということを見て理解できるようになり、発達に伴い、「ゴシゴシ」や「ドンドン」などの動きを実際に体験しながら身に着けていき、(名詞と動詞が)連続した二語文になる。また、絵本をめくるということも指先の発達に繋がる。だんだん成長してくるにつれて、オニやサンタさんなどのファンタジーの世界にはまってくる。子どもたちは、ファンタジーの世界にのめり込むことで、できなかったことをやり遂げる力や「どうにかなるさ」というポジティブな気持ちを獲得していくということもあると思う。

今の時期、虫や蝶が出てくると、子どもたちは自分が見つけた虫を調べたいとか、飼育の仕方を学びたいということで、科学絵本や図鑑にも興味を持ち始め、本がボロボロになるまで調べるということをやっている。そういうところに学びの芽がある。

私の保育園の隣にある長野東高校では、(生徒たちの)読書離れがあるということを知って色々と考えてみたのだが、活字を読んで、名作と言われる本(の内容)に共感するには自分の実体験が伴わなければ難しいことなのではないかと感じる。漫画や視覚教材で見た方がわかりやすいし想像しやすい、という部分で、保育園の現場では、読書というよりも、今の子供たち(の興味)に合わせた本を紹介して読みながら、原体験や遊びの中で学びの芽を育てたいという思いがある。小学校、中学校、高校へとつなげていくためには、草の匂いや風の心地よさなど、遊びの中で感じたり考えたりしたことと、その本とが連動していけると良いなと思っている。

年長さんには市立図書館から100冊もの本を借りて読み聞かせをしており、それも楽しいのだが、「おうちからも好きな本を持ってきて良いよ。紹介したい本があったら持ってきておいで。」と伝えている。中には戦争の本なんかを持ってくる子どももおり、それに興味を持つ子と持たない子がいるのだが、それぞれの子どもたちが心で感じたことがいつかどこかで、力になったり、いろいろなことの紐づけになったりすると良いなと思う。また、家庭でも友達が持ってきた本が読みたい、ということで、図書館に借りに行くなど、(そのようなやりとりを通して)親子の関係も広がっているという話も聞く。以上が私の園の現状である。

委員長： ありがとうございます。幼稚園は年間約250日、保育園は年間約300日あり、毎日絵本に溢れているのだと思う。そのため、保育園や幼稚園に通われているお子さんが本に触れる機会というのは、ある程度設定されているというのが現状かと思う。また、本を読めば良いだけでなく実体験を(伴うことで理解が深まる)という、貴重なご意見をいただいた。計画に取り込むには少し難しいかもしれないが

おっしゃる通りだと思う。

委員： こども広場をやっている現場から、お話をさせていただければと思うが、私どもの広場では、読書アドバイザーの資格を持っている（スタッフがいる）ので、新型コロナウイルスの影響が無い時には月1回読書会を実施している。お母さん自身が読書が好きだと積極的に集まってくださるが、あまり読書に興味がないお母さんは来てくださらない。保育園・幼稚園に入る前の（お子さんのいる）家庭だと、保護者の読書への興味の有無がおうちの中でどのくらい読書環境があるかという部分と繋がってくるのかなと感じている。

また、私は小さい子から小学生までの読み聞かせボランティアをやっているのだが、絵本から読み物に移る部分について、どのように橋渡ししていくかがいつも私の中では課題であり、そのようなことに関連した施策、提言ができると良いと思う。

委員長： 絵本と児童書の間にある名作と言われる本は「いやいやえん」や「エルマーのぼうけん」などがとつきやすい本だと思う。それこそ、おやつ的な本から入るのがいいのかもしれないと思っている。教育においても繋ぎの部分というのは幼小連携等、様々な課題があるが、読書においても毎日保育園、幼稚園で絵本に触れて育ってきた子どもたちが、教科書の物語と触れていくという繋ぎの部分は課題であると思う。

また、未就園のお子さんについてであるが、こども広場等に足を運ぶことができる家庭は良い。今回の計画に入れるべきかどうかは議論が必要だと思うが、子ども広場等に参加ができない、他との繋がりが無い家庭へのアウトリーチというものが現在ではできていない状況なのではないか。また、ひとり親家庭の親御さんは、絵本を読んであげたいけれども時間がないという状況である。このような状況へのフォローについても課題ではないかと思う。全てを（第四次計画に）盛り込むことは難しいかと思うが、課題としてはそんなところがあるのではないか。

委員： 私は市立長野図書館に（勤務して）いたのだが、図書館司書と80にのぼる市内の学校とはそんなに緊密にはできないというのが実情である。できることはやりたいのだが、図書館司書の人数にも限りがある。長野図書館は午後7時まで開館しているが、（司書の）人数を絞ってやっている中で、なかなか対応できないところがある。親御さんと子どもさんだけではなくて、大人のためのお話会やボランティアさんの育成など、そういう（子どもを取り巻く環境を整える）ことが、必要だと思っている。

委員長： 先程、第四次計画に向けた新たな視点というところで、子供を取り巻く環境としての大人の読書ということを挙げていただいたが、（子どもに）本を読めと言っても、家で父親がゴロゴロと Youtube を見ていたらなかなかそうはならないし、本のおもしろさを伝えていくためには、環境から整えていく必要はあるのかなと思

う。またそのあたりを具体的に何か考えていければ良いと思う。

委員： うちには小学生の子供が2人いるが、小学生が本を読まないというのは分かる。最近の子どもたちは忙しく、学校が終わると習い事、それが終わると宿題、宿題が終わると寝る時間となり、本を読む時間は学校にいる時ぐらいしかない状況である。また、学校でも新型コロナウイルス対策で、図書館に借りに行く曜日を定められてしまっている。例えば、1年1組は月曜日の何時間目というように、一週間のうちその時間しか（図書館に）行くことができないというように決められていて、本に触れる機会自体がコロナ前とコロナ後では変化していると思う。（子どもたちは）一応本は借りてくるが、似たような本、いわゆる「おやつ本」が多い。（「おやつ本」は）スッと入ってきて、面白くて、本を読まないよりは（「おやつ本」でも）読んでくれるからいいやと思ってしまうが、高学年になれば「ごはん本」の方にも少しは移行して欲しいなと思う。しかし、現状それを読む時間が無い、借りる場所も少ないというのは、親としてどうにかしなければいけないなと思う。

委員長： どうもありがとうございました。

委員： これから（第四次計画を）作成していくにあたり、義務（教育）の立場だけではなく、長野市全体の図書館を見ることができる立場から助言し、連携を働きかけられるような人物が必要である。例えば、市立図書館においてレファレンスやパスファインダーというサービスを提供していることを学校現場は知っているのだろうか。そのようなことについて連携を図ることができる立場の人を置くことはできないものか。

また、第三次計画の時から家庭というものが変わってきている。新型コロナウイルスが流行し、生きてくために（両親）2人で働かなければならないという家庭や、片親の方もだんだん増えてきている大変厳しい状況である。家庭というものを現時点でどのように受けとめて、どのような働きかけができるかということについての提言もここで考えられるのではないか。

最後になるが、フルタイムで勤務する司書を配置している郡市において、その司書が、伝記が全然借りられていないということに気が付き、学校の時間で伝記の読み聞かせをしたことによって、（伝記を）稼働させたという事例がある。先ほど学校司書の研修があるということをお聞きしたのだが、「ごはん本」を稼働させていくための司書研修も、今後、大事に考えていくような方針を出していただけないだろうか。また、予算的な都合もあると思うが、学校司書の立場の保証についても考えてほしい。学校図書館でしか改善できない現状があるとしたならば、図書館司書が長野市の読書活動推進の大きな要となる。そのようなことを踏まえて、次回（第四次計画の）原案を見せていただきたい。

委員長： ありがとうございました。学校司書や図書館司書が担う部分はとても大きい。だから、そこをフォローアップするシステムや仕組み、勤務体制についても考えてい

けたら良いと思う。

私には娘が2人おり、下の子は学区内の市立中学校、上の子が市立長野中学校の3年生であるが、2人共読書が好きである。上の子がよく学校で本を借りて来るのだが、市立長野の図書館は本当に使いやすいと言っている。何が良いかというと、無い本も予約してすぐに借りることができるということと、返却されたばかりの本が戸棚に並んでいることが良いということである。読んだことがないけれども誰かが読んだということはきっと面白い本なのだろうと考えて、本を探してくるようだ。まず図書館に足が向くかどうかというところもあるし、1人の意見であってそれが必ずしも正しいわけではないと思うのだが、ちょっとしたレイアウトの違いでも、そんな印象の違いが生まれるのだということを感じた。

委員長： 他に何かご意見はあるか。では、事務局の方から何かあればお願いします。

委員： 本日の資料をご覧いただき、他にご意見やお考えがありましたら6月の下旬ぐらいを目安に、メールで家庭・地域学びの課にお送りいただければと思います。

委員長： それでは以上をもって協議事項を終了とする。